

Prosodic Features の指導

広島大学大学院

竹 中 龍 範

1 はじめに

外国語教育において言語活動ということを考えるとき、果たして現在、十分に「言語を総合的に理解したり表現したりする活動」がなされていると言えるであろうか。コミュニケーションは決して音声と文法と語彙とからのみ構成されているものではない。Fancy は、コミュニケーションは(狭義の)言語と prosodic features (以下 PF と略す)と gestural behavior とから成る、として、第2言語教育における後二者の重要性を説いている。そして、学習者が PF を習得しなければならないというのは基本的なことであり、さらに gestural behavior も身につけることが望ましい、と述べている(②:410)。PF を言語の中に含めるか否かは別にして、それがコミュニケーションにおいて果たす役割は大きい。しかし、わが国の英語教育においては、残念ながら、PF の指導は決して充分であるとは言えない。高校生になっても、Do you like coffee or tea? の文に対して、次に Yes, I do. という答があっても、or の前で上げて、後で下げる、という中学校での指導に忠実に従っている。全国英語教育学会第2回大会でも問題別討論会「日本の英語教育の音声指導において欠けているものは何か」において、PF の指導の不充分さがとり上げられた。以下、コミュニケーションの観点から PF の指導について考察を加えていきたい。

2 PF とは

本稿は PF についての理論を考察するものではなく、また、その分類を試みるものでもない。しかし、論を進めるにあたって、基本的な PF の概念は明らかにしておかねばならないであろう。まず、PF に対する名称として、PF のほかに suprasegmental features という呼び方もある。特に後者はアメリカの構造言語学者を中心に用いられてきた。また、その構成要因については、ストレス、トーン、イントネーションがあげられようが、アメリカ構造言語学では一般に接続もそれに含んでいる。音韻論的観点からすれば、それらは示差的特徴を示すものである。英語においては、ストレスは示差的特徴を示し、また、文レベルにおけるピッチ・パタンであるイントネーションも示差的特徴を示すが、語のレベルにおけるピッチ・パタンであるトーンは示差的特徴を示さない(④:82)。接続が示差的特徴を示すものであることは言うまでもない。ただし、これらはすべて音韻論的観点に立ってのことであり、音声学的、あるいは物理学的、生理学的な観点からすれば、全く別の捉え方をされることになる。しかし、本稿は PF の指導について論じようとするものであり、音声学的、物理学的、生理学的分析が必要であるとは思われないので横においておく。

3 PF と意味情報

コミュニケーションの場においては、場面、意味、フィーリング、ストレス、イントネーションが複雑に組み合わさって、伝達内容をより正確なものにしている(⑨:110)。イントネーション、ストレスの変化によって、発話全体の意味に変化がもたらされる。それはその発話の字面的な意味ではなく、その全体を包みこみ、伝達内容そのものを決定する、より大きな意味を担っている。例えば、イントネーションについて見ると、これは単に平叙文とか疑問文とかを区別するだけではなく、喚情的意味(emotive meaning)を捉える手がかりとして特に重要なものである。また、それぞれの言語において、イントネーションは、喜びとかいらただしさ、いとわしさ、憎しみ、嘲笑などといった感情や態度の広汎な変化を示すものとしてある程度定型化されている。一方、ストレスは、その置かれる場所によって発話全体の意味を左右する。例えば、

I cannot recommend Mr. Jones too highly for the job.

という文の not と highly にストレスを置くと、この話者は Mr. Jones を強く推薦しているのに対し、too にストレスをおくとその推薦にあまり積極的でないことになる(⑩:84-85)。また、

Tom went to Africa last year.

の文はストレスのおき方で意味の変化を生じるが、It is ~ that などという置き換えを少なくとも、ストレスをどこにおくかでその意味は充分示される訳である。問題点は、この文の書き換えを指導する際に、同時に、ストレスのおき方でその意味が伝えられる、という点の指導がなされているかということである。その指導こそが言語活動に結びつくものではなかろうか。生きた場面における言語活動ということを頭におくならば、それぞれの場面と結びついた指導がなされねばならない。その点に留意して、以下、イントネーションと文強勢について見てみることにする。語強勢については、現状を見る限り、ほぼ充分な指導がなされていると言ってよいであろう。また、語強勢については生成音韻論の方で研究が進んでおり、その理論が英語教育に応用されるようになるであろうことも考えられる。しかし、文強勢の指導については必ずしも充分であるとは言い難い。

4 イントネーションの指導

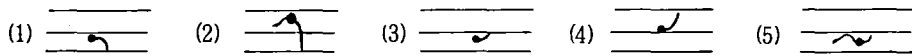
イントネーションが話者の感情や態度を表わすことはすでに述べた。例えば、'What are we having for dinner?' という文に対し、次の3種類のイントネーションが考えられる。

- (1) /²hwæt+ər+wɪj+hæviŋ+fər+³dɪnər¹\ /
- (2) /²hwæt+ər+wɪj+hæviŋ+fər+³dɪnər¹ / /
- (3) /²hwæt+ər+wɪj+hæviŋ+fər+³dɪnər³ / /

この場合、同時に接続の問題も絡んでくるが、(1)のように231のイントネーションに下降接続を伴って尋ねた時よりも、上昇接続を伴った(2)の方が丁寧であり、相手に対する敬意を示していることになる。しかし、(3)のように233+上昇接続の場合は、「あなたは 'What are we having for dinner?' とお尋ねになったのですか」という意味になる(⑤:49)。また、イントネーションとストレスの関係も考慮しなければならない。すなわち、上の例は dinner に第1強勢がおかれた

場合であり、ほかに、例えば *we* に第1強勢をおくと「彼らのことは分かったが、われわれの方は夕食に何を食べるのか」という含みをもつことになる。こうしてみると、一般疑問文は上昇調で、疑問詞疑問文は下降調で、という指導が適切、かつ充分なものかどうか、ここで指摘するまでもない。

また、イントネーションが語のレベルで見られる例として、次の *Yes.* に対する5つの型をあげておこう。



(1)は普通の「はい、そうです」であり、(2)は「勿論そうですとも」となる。(3)は電話の時などに使い、「はい、わかりました、お続け下さい」の意味となり、(4)は「本当にそうなんですか」、(5)は「多分そうでしょう」ということになる(⑦: 277)。これについては Ladefoged (1975: 97) にも同様の言及が見られる。

イントネーションの型の分類はこれまでも様々な試みがなされている。しかし、言語活動という側面を考える時、単にその分類を基にした指導ではなく、それぞれの場面に応じたイントネーションの指導がなされるべきであり、同時にそのイントネーションのもつ含意をも学習者に理解させるべきであろう。

5 ストレスの指導

文強勢を考えると、まずその原則を明らかにしておかねばならない。すなわち、英語においては、通例、内容語にはストレスがおかれ、機能語にはおかれぬ。その原則が破られるのは、あるいは強調のためであったり、あるいは対比のためであったりする。さらに、機能語は一般に、原則に従う場合は弱形をとり、原則を破る場合は強形をとる、という点も留意しておかねばならない。ところが、その原則が十分に指導されているのかどうか疑わしい。特に、文強勢は英語のリズムとも密接な関係があり、原則が守られないとリズムそのものも損われてしまう。のみならず、伝達内容そのものを変えてしまうことにもなる。この点に関して、今井氏の面白い例がある(⑥: 101)。すなわち、

I spént a night at Atámi with my wífe.

という文を *my* にストレスをおいて読む学生がいるが、そういう読み方では「『私』が温泉場に他人の妻を伴うのを常としている」のに「今回珍らしくも自分自身の妻をつれて行った」というようなことになるというのである。恐らくその学生はそんなことにはつめ気付いていないであろう。原則がわかっていないということは、同時に、例外の持つ意味が理解できないということである。それぞれの場面との関連において、辞書的な意味とその全体を大きく覆う意味と文強勢との関係を、原則と例外の両方の場合について指導すべきである。

さらに、ストレスとリズムの関係をもう少し見ていくことにする。ストレスを受けた音節の間は時間的に等間隔となり、その間にある音節は数の多少に拘らず、それぞれの強音節の間に押し込まれ、曖昧になる。従って、下の4つの文においては、大文字で書かれた音節がストレスを受け

るので、4文とも時間的には同じ長さで読まれる(㊦:23)。

The DOctor's a SURgeon.
The DOctor's a good SURgeon.
The DOctor's a very good SURgeon.
The DOctor's not a very good SURgeon.

6 むすび

これまでの音声指導において、PF は余りにもパタンとしての取り扱いしかなされていなかったと言っても過言ではなかろう。文の辞書の意味だけからは捉えられない全体的な意味、あるいは裏に隠された意味を担うPF の働きが軽視されてきたのではなかろうか。音素レベルの正確な発音といった指導に比べ、PF の指導は決して十分なものとは言えない。むしろ、母音や子音を先に教えて、そのあと正しいイントネーションやリズムと組み合わせるより、初めからPF の中で母音や子音を扱った方が効果的である(㊦:79)との主張もある。言語の機能を考える時、音声は意味を伝える手段であり、意味の伝達を100%ならしめるのにPF の果たす役割は大きい。今回はPF の指導について極く基本的な問題を考察した訳であるが、その基本が充分踏まえられているかという点必ずしもそうではないように思われる。今後、PF の機能などについて、paralinguistics や社会言語学の観点からの考察が必要となろうが、'from "linguistic PF" to "Communicative PF"' を提案して、この稿を終えたい。

[引用文献]

- (1) Alexander, H. G. (1969), *Meaning in Language*, Scott, Foresman and Co.
- (2) Fancy, A. (1976), "Expressivite : An Approach to French Language Instruction," *CMLR*, 32, 4.
- (3) Fries, C. C. (1945), *Teaching and Learning English as a Foreign Language*, The University of Michigan Press.
- (4) Fudge, E. C. (1970), "Phonology" in J. Lyons (ed.) *New Horizons in Linguistics*, Penguin Books.
- (5) Gleason, H. A., Jr. (1961), *An Introduction to Descriptive Linguistics*, Rev. ed., Holt, Rinehart and Winston.
- (6) 今井邦彦(1976), 「音声と文法」 in 中島文雄監修『講座新しい英語教育Ⅱ: 英語教育と英語学』, 大修館書店。
- (7) Jones, D. (1960), *An Outline of English Phonetics*, 9th ed. W. Heffer & Sons Ltd. / Maruzen.
- (8) Lado, R. (1964), *Language Teaching : A Scientific Approach*, McGraw-Hill.
- (9) Tibbitts, E. L. (1947), "Pronunciation Difficulties : Corrective Treatment : III. Intonation" *ELT*, 1, 4.

[参考文献]

- ・ 安倍勇(1958), 『英語イントネーションの研究』研究社。
- ・ Kingdon, R. (1948), "The Teaching of English Intonation, (1), (2), (3), and (4)," *ELT*, 2, 4 ~ 3, 1.
- ・ ----- (1949a), "The Teaching of English Stress," *ELT*, 3, 6.
- ・ ----- (1949b), "The Semantic Functions of Stress and Tone," *ELT*, 3, 7.
- ・ Ladefoged, P. (1975), *A Course in Phonetics*, Harcourt Brace Jovanovich.